

教師が主体的に学び合える中学校校内研究会の取り組み

M16EP003

近藤 千佳

1 はじめに

中央教育審議会答申(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」において、「学び続ける教師像」の確立が謳われている。答申には「教員は日々の教育実践や授業研究等の校内研修、近隣の学校との合同研究会、民間教育研究団体の研究会への参加、自発的な研修によって、学び合い、高め合いながら実践力を身に付けていく。しかしながら近年では学校の小規模化や年齢構成の変化などによってこうした機能が弱まりつつある」とある。また「校内研修の質・量の充実を積極的に支援する視点から、教育委員会や教育センターは指導體制の確立、組織的・計画的な学校への指導・助言、教育委員会・学校と大学との連携・協働や近隣の学校との合同研修など、取組を推進する」とあるように、教育事務所や大学などと連携しながら校内研究会を充実させていくことが必要とされている。その一方で、年齢構成の変化等によって校内研究の機能が弱まりつつあるという課題も示されている。現場にいる教師自らが中心となって、校内研究会を活性化させ、学び合い、高め合いながら実践力を高める校内研究会のシステムを作り出すことが必要ではないかと考えた。

中学校の現場では、校内研究会が上手く機能していないという状況が先行研究からも示されている。星野(2014)は、「自分の専門教科における専門性を高めることを意識していないといえる。この職員の意識の低さを変えることが大きな課題である。」と述べており、学び合いを重視した校内研究会で教師の学ぶ意識についての課題が示されている。また、勤務校においても、小規模校であるため担当

教師が数名であるので教科内の学び合いが成り立ちにくいと感じる場面がこれまでもあった。特に今年度は研究会に外部の先生が参加するため、校内研究会における学び合いが深まりにくいのではないかと心配された。このような課題をふまえ、研究主任が運営の仕方を工夫することで、教師同士の人間関係を作りながら、教科の専門性の枠を超えた、主体的な学び合いができる校内研究会のプログラムを作成していきたいと考えた。

以上のことから、本研究では中学校の校内研究会において研究主任がどのような工夫をすれば、教師同士が学び合い、高め合える校内研究会になるのかを検討していきたい。

2 研究の目的

中学校で教師がアクティブラーナーとなり学び合い、教師力向上を目指すために、研究主任は校内研究会においてどのような工夫をすればよいか検討することを目的とする。

3 研究の方法

- (1) 先行研究をもとに、主体的な学び合いができる校内研究の持ち方を計画・実行する。
- (2) 研究主任として教師が主体的に学び合える校内研究会(授業研究会・学習会)のプログラムを作り、提案する。

4 結果と考察

(1) 授業研究会の実践

《学び合いができる研究会》—4つの工夫

教師が互いに学び合い、教師力の向上を目指すための研究会として、次のような流れで研究会を行った。

表1 研究会の流れを示す表

流れ	時間	活動内容
		【①研究会前の工夫】 席決めをする。研究主任が司会をする。
授業者より授業の説明	5分	授業者が授業の意図について説明を行う。
授業の質疑応答		授業者に授業内容についての質問をする。その後、授業中の生徒の様子について観察者が発表し、共有する。
グループ協議	20分	【②話し合いの際の工夫】 グループ協議の前に話し合いの柱を確認する。グループ協議は付箋を用いて行う。さらに、アイデア付箋を用意し、グループ協議で出た意見を記入する。
ギャラリートーク	5分	【③教師同士が関わり合う意見交換の工夫】 ギャラリートーク等の方法を用いて、各グループから出された意見を共有する。
シェアリング	15分	【④意見発表する際の工夫】 司会者がファシリテートして、グループでの話し合いをもとに意見交換をする。
授業者のまとめ	5分	ギャラリートーク、シェアリングで出された意見をもとに授業者自身が振り返りを行う。
指導助言	20分	授業について教科の専門的な立場から指導をしていただく。

教師の学び合いができる研究会を行うためには、シェアリングで多くの意見が出され、普段の授業に生かせる研究会を行うことが必要ではないかと考えた。シェアリングで多くの意見を出せるようにするために、人間関係作りの場とアイデアを出し合う場（考えを

表出する場面と考えを伝える場面）を設定していくことが必要ではないかと考えた。

そのために、それぞれの場面で次のような手立てを行った。

① 研究会前の工夫

アイスブレイクの要素を取り入れた席決めを行う。

研究会の前にコミュニケーションの機会を設定し、話しやすい雰囲気を作ることを目的として、アイスブレイクの要素を取り入れた席決めを行った。

グループ分けのテーマは、誕生月の順、名前の画数順、名前のあいうえお順、飴ちゃんグループ分け等を行った。参加者は会場に入る際にグループ分けのお題を書いた紙を見て、お題に書かれているように席決め（グループ分け）を行う。司会者である研究主任はあまり関わらず、参加者同士でコミュニケーションをとって席を決めるように取り組んだ。

② 話し合いの際の工夫

課題改善のアイデアを、グループで相談しながら付箋に記入していく。

勤務校では以前から付箋を用いたワークショップ型研究会を行っていた。小グループで活発な意見交換が行われていた。意見交換をするだけでなく、良い授業をするためのアイデアを生み出すことで、より主体的に学び合いができるのではないかと考えた。

成果を書く赤色の付箋と課題を書く青い付箋以外に、黄色い付箋をアイデア付箋とした。青い付箋に書かれた課題に対して、グループ内で相談をしながら、「課題改善のアイデア」や「授業実践例」といった改善案を黄色い付箋に記入し、グループ協議の際に模造紙に掲示するようにした。

また、グループ協議の前に話し合いの柱を

設定し、視点を持って話し合いができるようにした。加えて、グループ協議を行う際は、ワークショップ型教員研修のマトリクス法を用いて意見交換を行った。

③ 教師同士が関わり合う意見交換の工夫

参加者が各グループの話し合いの内容をギャラリートーク等の方法で共有する。

学び合いのために教師同士が積極的に関わり合い、意見交換を行う機会を作ろうと考えた。教師同士がかかわりを持つことで、短時間で他グループから出た意見をすべて把握できるようになり、事前に意見交換することで、最後の話し合いの場であるシェアリングで教師も自信をもって意見を話すことができるようになるのではないかと考えた。

方法としては、ギャラリートークなどのファシリテーションの技法を用いて意見交換を行った。時間を決めて、説明する人を設定せずにテーブルに置いた模造紙を個人のペースで見あうという取り組みも行った。

④ 意見発表する際の工夫

司会者がファシリテートして、グループでの話し合いをもとに意見交換をする。

ギャラリートーク等の学び合いをもとに全体で行う意見交換の場を「シェアリング」の時間とした。このシェアリングの場面で活発な意見交換ができることが主体的に学び合える校内研究会には重要なことであると考え、グループ協議やギャラリートーク等の活動を生かした意見発表ができるように促した。司会者(研究主任)がファシリテーターとなり、スムーズに意見交換ができるように工夫した。発言者の意見をまとめ次の発言につなげたり、グループの意見を確認し意見交換の流れを前以て作ったり、各テーブルをまわり発言を促すようにしたり、ファシリテーターとしての

工夫を行った。

(2) 授業研究会実践の結果

校内研究会に参加をした全職員を対象に「学び合いの校内研の運営において、有効だったと思う取り組み、5つを選び、それを選んだ理由を書いてください。」というアンケートを行った。今年度行った取り組みの項目は次に示すとおりである。

- I 研究会前の席決め
- II 話し合いの柱の設定
- III 付箋を使ったグループ協議
- IV グループの様子を発表する
- V アイデア付箋の活用
- VI ギャラリートーク
- VII シェアリング
- VIII 指導助言者が参加をする
- IX 研究授業を多く行う
- X お茶菓子を用意する
- XI 研究主任が進行をする

このアンケート結果を以下に示す。

表2 アンケート結果の表

	良かった順位												合計点	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
① 研究会前の席決め		5					5		5			5		4
② 話し合いの柱の設定		4		3		1	4	4			2			18
③ 付箋を使ったグループ協議	2		3	1	1	2	1	1	1		3	1		44
④ グループの様子を発表する					4			2		2				6
⑤ アイデア付箋の活用	3	3	4	5		3				1	4	2		23
⑥ ギャラリートーク	1		5	4	2	5	2		2				3	28
⑦ シェアリング		2			3	4		3	3	3	5	4		21
⑧ 指導助言者が参加をする			2	2	5					4				11
⑨ 研究授業を多く行う		1	1							4	5	1		18
⑩ お茶菓子を用意する	5													1
⑪ 研究主任が進行をする	4						3	5						6

合計点は、順位の1位を5点、2位を4点、3位を3点、4位を2点、5位を1点として出したものである。

このアンケート結果より、参加をした職員が「学び合いの校内研」のために「付箋を使ったグループ協議」、「ギャラリートークの実

践]、「アイデア付箋の活用」、「シェアリングの実践」を行うことが有効であると考えていることが明らかになった。「付箋を使ったグループ協議」について村川(2006)は、「教職員一人ひとりの潜在力を引き出し生かし合うことにより、互いの教育実践力が高まり学校内に学び合いの文化が醸成される。また、互いが信頼し合い尊重し合う関係が築かれていく。その結果として、学校教育の世界においても組織としての「学校力」、個人としての「教師力」が高められていくのである」と述べている。勤務校でも「付箋があることで誰もが意見をしやすい、また共有しやすくなる」、「全員が意見を言える」、「意見が出しやすく、課

題点などがわかりやすくなる」等の意見が出され、グループ内で意見を交換しあうことで、教師力の向上につながったのがと考えられる。これ以降では、特に「研究会前の席決めの工夫」、「アイデア付箋の活用」、「ギャラリートークの実践」について、述べることにする。

① 研究会前の席決めの工夫について

(アイスブレイクを生かした席決め)

校内研究会に参加をした職員に「アイスブレイクを生かした席決め」が学び合いに有効だと思った理由について記述のアンケートを行った。その結果をまとめていくと、次のような良さが見えてきた。

表3 アイスブレイクを生かした席決めが有効だった理由の分類表

	大カテゴリー	小カテゴリー	具体例
アイスブレイクを生かした席決め	やる気につながる	ユーモアがある	毎回楽しみにしています。
			席決めのテーマが楽しみだった。
			楽しさがあると思います。
			ユーモアがあると思います。
			どんなグループなのか楽しかったです。
		新鮮さがある	毎回シャッフルされ新鮮さが出る。
	交流のきっかけ作りができる	多くの人と話ができる	いつも違う人と話ができる。
			他の先生方の意見を聞くことができ、勉強になる。
			多くの人と関わり、勉強になる。
			先生方から話を聞くことができ、楽しみ。
			多くの先生と交流できる。
		コミュニケーション作り	コミュニケーションのきっかけになる。
	話しやすい雰囲気作りができる	緊張をほぐす	リラックスしたムードで始めることができる。
			緊張がほぐれる。
		暖かい雰囲気になる	場が和む。
話しやすい環境だと思います。			
楽しく、温かい雰囲気にもなる。			

この結果より、校内研究会前の席決めには教師の学び合いを支える3つの効果があることが明らかになった。1つ目は「やる気につながる」ことである。アイスブレイクでは誕

生日順、名前のアイウエオ順等、いろいろな方法でグループ分けを行うことができる。毎回同じ方法ではなく、違う方法を仕組むことにより参加者が「今回はどのようにグループ

分けを行うのだろう」と楽しさを感じ、それによって校内研究会に参加する前向きな気持ちを引き出すことにつながったのではないかと考える。2つ目は「交流のきっかけ作りができる」ことである。アイスブレイクの要素を取り入れた席決めでは、会話をしなければ席を決めることができないことが多い。席決めのお題をきっかけに会話を行うことができる。このため、初対面同士でも気軽に校内研究会に参加できるようになったと考える。3つ目は「話しやすい雰囲気作りができる」ことである。研究会の前に会話ができることで

緊張感がほぐれ、研究会に前向きに参加することができるのではないかと考える。

アイスブレイクを生かした席決めを行うことにより、大人でも楽しみながらグループ作りができ、前向きに活動を進められるようになるため、学び合いの素地を作る効果があることが明らかになった。

② アイディア付箋の活用について

この実践が学び合いに有効だと思った理由について記述のアンケートを行った。結果をまとめると、次のような良さが見えてきた。

表4 アイディア付箋の活用が有効だった理由の分類表

	大カテゴリー	小カテゴリー	具体例
アイディア付箋の活用	新しいアイディアを出す	高め合いができる	どうすれば良いかを出し合うことで高め合える。
			より良くするための話し合いが行われる。
			次どうするべきかを考えることが良い。
		新しいアイディアを考えることができる	前向きな考えが持てる。
			様々なアイディアを紹介できる。
			課題の解決策を考えることができた。
	新しいアイディアを知る	新しいアイディアを知ることができる。	良いアイディアを教えてもらうことができた。
			授業をよくするためのポイントを知ることができた。
			周りの先生方のアイディアを読み、勉強になる。
		他グループのアイディアを聞くことができる。	
自分の実践に生かせる	自分の実践に結びつけて思考できる。		
	疑問や解消の手助けになると思う。		

この結果から、アイディア付箋を活用することは2つの効果があることが明らかになった。1つ目は、「新しいアイディアを出す」ことの良さである。アイディア付箋があることで、グループ協議の中で授業の課題について、どのようにすれば上手くいったのかを考える機会ができる。その際、自分事として考えたり、授業改善に向けて参加者同士が前向きに意見交換できたりする。アイディア付箋を考える活動が、教師同士の高め合いの機会

となったと考えられる。2つ目は、「新しいアイディアを知る」ことの良さである。グループにはベテランの教師、中堅教師、若手教師が混ざっている。そのグループで意見交換をすることでベテラン教師にとっても、若手教師にとっても学びとなり、授業アイデアの蓄積ができたのだと考えることができる。

アイディア付箋を活用することにより、グループ内で実践に生かせる学びの蓄積ができるので、教師の学び合いを深める効果がある

ことが明らかになった。

この実践が学び合いに有効だと思った理由について記述のアンケートを行った。結果をまとめると、次のような良さが見えてきた。

③ ギャラリートーク等の実践について
(教師同士が関わり合う意見交換)

表5 ギャラリートークが有効だった理由の分類表

	大カテゴリー	小カテゴリー	具体例
ギャラリートーク	広く情報収集ができる	他者の考えを学ぶ	他のグループの付箋やまとめが勉強になりました。
			他者の考えを学ぶことができる。
		すべての班の意見を知る	すべての班の意見を知ることができ、勉強になった。
			全体把握ができて良い。
	個の学びの助けになる	自分のペースで学べる	自由さが良い。
			自由に自分のペースで見てもられる。
			効率よく交流することができる。
		質問しやすい	他のグループの考えに気軽に質問できる。

この結果から、ギャラリートーク等を行うことは2つの効果があると明らかになった。1つ目は、「広く情報収集ができる」ことである。自分のグループだけでなく、他のグループのいろいろな意見を知ることができる。さらにアイデア付箋の記述もあるため、授業改善についての考えを多く学ぶことができる。2つ目は、「個の学びの助けになる」ことである。ギャラリートーク等を行う場合、自分の興味に応じて見学する時間を変え、付箋の内容をじっくり見ることができる。また、わからないことについては納得のいくまで質問することも良さとしてあげられる。

ギャラリートーク等で教師同士が関わり合う意見交換を行うことで、他グループの多くの意見を知り、興味のある内容についてじっくり学ぶことができるので、教師の学びの幅を広げる効果があることが明らかになった。

(3) 学習会の実践

授業研究会以外に、講師を招いて勉強を行う、「学習会」を計画した。今年度は5月と8月に大学の先生を招聘して、学習会を開催した。5月の学習会では先進的な研究を行って

いる実践について、8月の学習会では1学期の課題となった教師のファシリテーションについて学習を行った。流れは表8に示すとおりである。

表6 学習会の流れを示す表

流れ	時間	活動内容
学習会	60分	講師を招き、学習会を行う。
状況説明	20分	担当者が現状についての説明をする。(担任がクラスの様子を説明する等)
説明についての質疑応答	5分	担当者が発表した内容についての質問をする。
グループ協議	20分	話し合いの柱を設け、グループごと話し合いをする。その際、付箋を用いて意見交換を行う。
ギャラリートーク	5分	付箋を貼った模造紙を壁に貼り付け、ギャラリートークを行う。
グループ協議	5分	ギャラリートークをの学びを生かした話し合いを行う。
意見交換	15分	全体で意見交換を行う。
まとめ	5分	代表者が全体を振り返り、まとめをする。

学習会における1つ目の工夫は、学び合いをすることである。ギャラリートークで分かれて見て回った後、もう一度グループの中で検討を行い、他のグループの考えを参考にしながらより良いものを作っていけるようにした。2つ目の工夫としては、研究会全体を見渡す人を作ることをした。この学習会は学校経営に関する内容であること、グループを使っている研究協議の際には常に全体を見渡す人が必要であることから、全体を見渡す人を校長先生として、グループ協議の様子を見ていただきながら研究協議の最後にこれからの方向性を発表していただくように工夫した。

(4) 学習会の結果

学習会での課題として、「学習会とグループ協議が全く別物になってしまっている」こと、「立場によって学ぶ視点が違うことも考慮する必要がある」ことが挙げられた。学習会を終えた後の参加者の感想は次のようなものがあった。

- | |
|---|
| <p>I) グループ協議で他の先生の意見を聞いて勉強になった。</p> <p>II) 学期前に学年で課題と方針を共有できて良かった。</p> <p>III) 学年の現状を共有できて良かった。</p> <p>IV) 意欲の低い生徒をどのように学びに結びつけていくか考えることができた。</p> <p>V) (学習会で) 具体的にどのようにすれば良いか教えてほしかった。</p> <p>VI) ファシリテーションの活動プリントがほしいです。</p> <p>VII) 10のアイテムの本またはプリントがあればほしいです。</p> |
|---|

参加者の感想を見ると、参加者のニーズは2つあることが明らかになった。I～IVのような「自身で考え学びたい・他者と協力して学びたい」ニーズとV～VIIのような「すぐに使える役に立つ知識・技能の習得したい」ニーズである。

これより学習会のプログラムには、目的を明確すること、参加者のニーズに対応するこ

との2つの要素を取り入れることが必要であると明らかになった。この分析をもとに、表9に示すような学習会プログラムを作成した。

表7 学習会の流れを示す表(改善案)

流れ	時間	活動内容
見通しを持つ	10分	<p>○目的(テーマ)の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「どんなことを学び、どんな風に生かしていくか」につながるような、目的の提示をする。 <p>○テーマについてのグループディスカッション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現状についての課題を話す。 ・資料を見ながら、内容を把握し、詳しく聞きたい個所を確認する。 ・講師の先生も、グループを回りディスカッションの様子を把握する。
学習会	60分	<p>○学習会の実施</p> <p>○質問、感想の発表</p>
グループ解決	15分	<p>○グループ討議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習会の内容を生かしながら、研究を深めていくためには、どうしたらよいかを考えていく。付箋を利用して、グループの中で各自意見を出しやすいようにしていく。
深める	25分	<p>○シェアリング</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギャラリートークを行って、各グループで出された意見を共有する。 ・ギャラリートークの内容を踏まえて、もう一度各グループでの意見交換をする。 ・最後に全体での意見交換をする。
まとめ	10分	<p>○目的(テーマ)についての振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シェアリングでの意見を踏まえて、代表者(管理職、主任)がまとめを行う。 ・個人の振り返りはOPPシートを使う。

新しい学習会プログラムでは、「すぐに使える役に立つ知識・技能の習得したい」ニーズに対応するために、内容把握と動機付けとし

て、学習会前のディスカッションを設定した。受け身になりがちな学習会であるが、グループで協議しながら内容を把握することで関心を持って話を聞けるようにしていきたいと考えた。次に、「自身で考え学びたい・他者と協力して学びたい」ニーズに対応するために、学習した内容をどのように実践していくかを考える機会として、学習会後のグループ協議を設定した。学習会と実践を関連づけ、話を聞くだけに終わらず、参加者も講師も考え、学び合える機会を作ることができるのではないかと考えた。また、目的を明確にすることについては、会の最初に目的を提示し、会の終わりに振り返りを行うことで、目的を明確にし、一貫性のある学習会を行うことができると考えた。このプログラムはまだ、実践できていないプログラムとなっている。来年度以降に実践し、効果を検討していきたいと考える。

5 おわりに

本研究の成果をまとめると、教師が主体的に学び合うために有効であったと考えたことの1つ目は、研究主任が教師の学び合いを深化させる流れを構築することである。今年度の実践では研究授業を行い、研究会の中でグループ協議を行い、教師同士が関わり合う意見交換を行い、最後にシェアリングを行った。この流れは、研究授業で学びのきっかけを作り、それをグループ協議で深め、さらに意見交換でこの学びを広げ、シェアリングで広がった学びをさらに深めていくといったサイクルを作り出した。このサイクルが参加者の主体的な学び合いにつながったのだと考えた。また、このサイクルを繰り返すことで、校内研に対する充実感を得ることができるのだと明らかになった。

教師が主体的に学び合うために有効であったと考えたことの2つ目は、研究主任が学び合いを促す運営を行うことである。今年度行

ってきたことは、人間関係作りをしたり、小グループを活用して意見発表ができるようにしたり、めあての提示と振り返りを行ったり、進行役がファシリテートすることである。これは普段授業者として私たちが行うことと同じであり、校内研の運営にも授業のテクニックを応用していくという視点が大切であることが明らかになった。

今年度の課題としては、学習会プログラムを実施することができなかったこと、校内研究会の学びが普段の授業に生かされなかったことである。そこで来年度は、学習会プログラムを実践し、学習会プログラムがどのように効果的なのか、より良い学び合いのプログラムは何かを検討していきたいと考える。

校内研の学びが普段の授業に十分に生かされていないかったという課題については、校内研究会で学んだことを普段の実践をつなげるために、実態を分析し、先行研究を参考にしながらシステム作りをしていきたい。

この2つを実践し、校内研究会が教師にとって今よりも身近で効果的のある研究会を目指していきたいと考える。

6 引用・参考文献

- 青木将幸(2013)「リラックスと集中を一瞬でつくるアイスブレイクベスト 50」ほんの森出版
- 中央教育審議会(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(答申)
- ちょんせいこ(2009)「学校が元気になるファシリテーター入門講座」解放出版社
- 星野桂一(2014)一人ひとりが経営参画意識を高める学校のあり方 山形大学大学院教育実践研究科年報
- 堀裕嗣(2012)「教室ファシリテーション 10のアイテム・100のステップ」学事出版株式会社
- 村川雅弘(2016)「ワークショップ型教員研修はじめの一步」教育開発研究所